

日本英語教育史学会 会報

328

2025 年 8 月 9 日

HiSELT Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 田邊祐司)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
tel : 0824-74-1727 fax : 0824-74-0191
e-mail : membership@hiselt.org

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)

ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873

ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト <https://hiselt.org/>

第303回研究例会報告

2025 (令和 7) 年 7 月 19 日 (土), 第 303 回研究例会が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。参加者は 25 名でした。

例会では研究発表と企画『『英語教育史事典』をどう編むか』が行われました。最初の研究発表では、吉村和也氏 (御所市立葛中学校) が「中学校英語教科書に見られるジェンダーの表され方」というタイトルで発表されました。続いて行われた『『英語教育史事典』をどう編むか』の企画では、上野舞斗氏 (四天王寺大学), 惟任泰裕氏 (大阪成蹊大学), 孫工季也氏 (金沢学院大学) を話題提供者に迎え、提案者として江利川春雄氏 (和歌山大学名誉教授) が編集方針や論点などの素案を提示されました。司会は熊谷允岐氏 (茨城大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますので、ご参照ください (1 は吉村氏, 2 は江利川氏, 上野氏, 惟任氏, 及び孫工氏の発表への感想です)。

<発表 1 の感想>

- ◆今後の教科書研究の参考になった。(山下徹)
- ◆教科書の例文におけるジェンダーの表され方、教科書の談話レベルや文章レベルでのジェンダーの表され方も知りたいと思った。(岩橋一樹)
- ◆自分も中学校英語教員であるが、このような目で分析した事はなかったので、非常に興味深く感じました。教えている間は、自分自身があまり性差を意識していないこともあり、思い至りませんでした。もっとも英語の教科書はダイアログが男性の声、女性の声で、生徒も聞き取りやすいからか、必ず両方の声が登場していることが多かったので、割と自然に感じていました。同時に今その視点を持てた事は良かったととても思いました。ありがとうございました。(安部直子)
- ◆質疑応答でも出ていたのが、膨大な時間がかかる調査の発表に感心しました。中学の教員という、多忙な時間の中での研究たいへんかと思いますが、ぜひ継続し、さらにはグループを作って質疑応答で指摘されたようなことを解決して頂ければと思います。(山崎吉朗)

<発表 2 の感想>

- ◆意義のあるプロジェクトであると感じた。(山下徹)
- ◆非常に壮大かつ未来に必要なプロジェクトが、数年後に先生方の力を合わせて出来上がるこ

とが大変楽しみです。(堀由紀)

◆AI が教育現場で利用される時代を迎え、本事典が今後の英語教育の在り方を考える際の羅針盤のような役割を果たすと思います。学会の全総力を結集させて実現させていきたいです。(水野邦太郎)

◆英語教育史の専門家以外でも使える事典なので完成が待ち遠しいです。(岩橋一樹)

◆聞いてるだけでも素晴らしい事典であるなぁと感じました。値段にもよるかもしれませんが、出版されたらぜひ自分は購入したいと思いました。それぐらい魅力的に思いました。編み方については本作りのプロの方々を考えておられることなので、筋書きが目に見え広がりもよくわかり、とても良い本になるなぁと言う予感を持ちました。(安部直子)

◆気が遠くなるような、遠大な計画で、どの位の人数で、どの位時間がかかるかわかりませんが、幕末からの英語教育(出来れば英語以外の教育も交えて)の歴史の事典(辞典)の計画にわくわくします。一挙にではなく、分冊で出版されると、生きている内に拝見できると思いました。たいへん期待します。(山崎吉朗)

<会全体に対する感想>

◆いつもありがとうございます。(堀由紀)

◆精力的にいつも例会を開いていていつも楽しく参加させていただいています。(岩橋一樹)

◆シンプルに、かつ明快に進行してとても良かったと思いました(安部直子)

◆会員以外も参加させて頂き、ありがたいです。(山崎吉朗)

発表を終えて

吉村 和也

このたびは、発表の機会をいただき、誠にありがとうございました。

本発表は「中学校英語教科書に見られるジェンダーの表され方」と題し、2023 年に開催されました第 295 回研究例会での発表内容の続編であります。本研究では、中学校英語科の検定教科書に掲載されている写真・挿絵に登場する人物の性別比や職業別の男女比、さらには登場人物の立ち位置に着目することで、そこに潜むジェンダーバイアスの実態を明らかにすることを試みました。分析の過程では、戦後から現行版までの複数の教科書を精査し、特定の時代や場面において男性が優位に描かれ、女性が従属的に描かれている傾向があることが確認されました。一方で、近年の教科書では男女の登場回数のバランスが取れてきており、改善の兆しも見られました。しかしながらある教科書ではこれまで問題視されていた職業における偏り以外の職業で偏りが確認され、今後も継続的に研究を進める必要があると考えられます。

本研究はまだ出発点到らず、今後は戦前の教科書や、QR コード等を用いたデジタル教材の中におけるジェンダーの表象についても分析を進めていきたいと考えています。また、性別の同定においては多様な視点を取り入れるため、異なる世代や性別の評価者を交えた分析も検討してまいります。

発表後、多くの皆さまから質問や指摘を頂戴しました。この場をお借りして深くお礼申し上げます。

発表を終えて

提案者 江利川 春雄

話題提供者 上野 舞斗・惟任 泰裕・孫工 季也

『日本英語教育史事典』作成を提起して 1 年。『日本英語教育史事典』構想と目次案』を提案する機会を与えられたことに感謝します。この事典は学会創設 50 周年事業の一環として「日本英語教育史研究の到達点を事典という形で集大成することで、研究のさらなる飛躍の礎とするとともに、今後の英語教育の質的充実に資する」ことを意図しています。

「英語教育史百科」のような事典を作りたいのですが、未解明の領域が多すぎます。たとえば「英語教育レコード史」「教師用指導書史」「英語教育実践史」などなど、穴だらけです。英学と英語、英語教授と英語教育などの基礎概念の歴史的考察と再定義も必要です。これら未成領域をあぶり出し、研究部会を組織し、研究例会・大会で発表し、論文化を組織的に促す。それによって研究者を育て、日本英語教育史学会を活性化させる。これこそが事典作成の最大の意義です。「獲る漁業から育てる漁業」への移行が進んでいるように、私たちも個人による研究発表や論文を受動的に待つだけでなく、研究課題の提示から論文化までを組織的・能動的に進めましょう。

例会では建設的な御意見を多数いただきました。それらを反映させて構想と目次案を改訂し、研究部会の組織化、編集体制の構築、項目の選定、執筆要項の作成などを進めましょう。会員諸氏の積極的な参加をお願いいたします。

>> 事務局より

>> 事務局の「夏休み」について

事務局の業務は平日のみとしておりますが、8 月 22 日 (金) より 9 月 11 日 (木) までは遅い「夏休み」をいただき、電子メールへの対応のみとさせていただきます。この間に郵便・電話 (留守番電話への吹き込み)・ファクシミリ等をお寄せくださった方へのお返事は 9 月 12 日 (金) 以降となりますが、どうぞご了承ください。

(文責：事務局)

>> この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第 304 回研究例会 2025 年 9 月 20 日 (土) オンライン開催
- ◆ 第 305 回研究例会 2025 年 11 月 15 日 (土) 広島 (サテライトキャンパスひろしま)
- ◆ 第 306 回研究例会 2026 年 3 月 21 日 (土) オンライン開催

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100~200 字程度)、(4) 使用予定機器、の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (3 月発表希望であれば 12 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiselt.org

『日本英語教育史研究』第 41 号 投稿論文の募集

2026 年 5 月に刊行予定の研究紀要『日本英語教育史研究』第 41 号への投稿論文を募集します。投稿締切は 9 月 30 日 (火) 23:59 JST です。投稿規程・標準書式に沿ってご投稿ください。

投稿先・問合せ先 (紀要編集委員会) kiyo@hiselt.org

>> 新入会員

- ◆ 樋口 拓也 (ひぐち たくや) 東京都 京都大学大学院 (院生)
- ◆ 山下 徹 (やました とおる) 香川県 熊本大学名誉教授

日本英語教育史学会 第 304 回 研究例会

日 時 : 2025 年 9 月 20 日 (土) 14:00~17:00

オンライン開催

自著を語る 「英語受容の光と影～江利川春雄著『英語と明治維新：語学はいかに近代日本を創ったか』(ちくま新書、2025)を手がかりに～」

発表者：江利川 春雄 氏 (和歌山大学名誉教授)

指定討論者：柁木 貴之 氏 (北海学園大学)

【発表者から】迫り来る西洋列強に対抗するため、幕府も薩長も競って英語を学び、西洋文明を受容した。だがそれは文明開化 (近代化) と脱亜入欧 (帝国主義) という光と影を伴っていた。蘭学から英学への転換の社会背景、英語学習の喜怒哀楽、英語とドイツ語の対抗、日本語近代化への英語の影響など、英語と明治維新の関係を振り返ることで、外国語を学ぶ根源的な意味を考えたい。

企画 わたしのしごと「英単語集と私の交差点：挫折と展望の 10 年」

熊谷 允岐 氏 (茨城大学)

【発表者から】英単語集の研究を始め、今年でちょうど 10 年目を迎える。研究当初は、応用言語学的な視点から英単語集を研究していたが、大きな壁にぶつかった。そこで、自身の研究を改めて見つめ直すため、歴史的な観点から英単語集の研究を始め、現在に至る。実践的な面で教材を研究することの難しさと、歴史研究の重要性、それら二つの統合を目指した 10 年間に触れながら、現代、そして今後の英単語集との向き合い方について自由に議論を行いたい。

参加費： 無料

問合せ： 日本英語教育史学会例会担当 (reikai@hiselt.org)

EDITOR'S BOX 先日勤務先に熊が現れました。徒歩での外出も難しくなって、人との接触を避ければよかったコロナ禍以上にストレスを感じています。安心な生活がさらに遠のいた気がしています。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 newsletter@hiselt.org)